

國內一般形勢

(一) 經濟形勢

1、一九二九年後半期に端を設したる世界恐慌の波は吾國經濟界を根柢より動搖せしめ生産は減退し、貿易は萎縮し物價は暴落して、多数の失業者を放出せしめ、他面農業恐慌の進行と共に深刻なる農村破綻を招來した。

2、かかる恐慌の狀態を持續しつつ、一九三一年の下半期に掛けて、即ち「滿洲事變」と「金輸出禁止」の二大事件を惹起した。

滿洲事變は、國家非常時の名の下に急激なる軍事實質の老張を齎し金輸出再禁止に依る爲替下落はソシヤアル、ダンピングを武器とする輸出増進を生じて、日本資本主義は恐慌のさ中にも拘らず、異常なる躍進と海に特徴的な保相を呈してゐる。

3、然も赤字公債に依る軍需インフレは軍需工業と一部貿易關係工業の好況を現出し、それは他産業部門の不振と對照して、甚しく變態的な現象であり、且つ軍需工業は非生産的産業にして、これが増大は國家財政を益々瀕瀕せしめ、同時に正常な生産力の發展に打撃を與へる。

一方に替下落は労働者大衆に犠牲を轉化するソシヤアル、ダンピングによつて、商品輸出を益んならしむるも、それは紙屑圓にして金價値ではない。

然もこれが爲各國關稅引上げに乘り上げて、今や行價みの狀態に遺棄せるばかりでなく、畢竟輸入原料となつて生産費を抑壓し逐年輸入は増加の傾向にあり、輸出品は過剰し停滯の兆候を示しつつある。

4、更に農村は一層深刻にして、工業品と農産物との價格差は著